

皆さま

拙文ご笑読下さい。

10月20日に帝京学園祭を行いますので、その準備に追われています。
当地は最後の名残の秋で、これから冬支度に入ります。

パリだとこれからが「食」のシーズンで張り切るところですが、それが全くないのが
英国暮らしのつらいところです。
年末までにパリに2回行けるかどうか。ワインの買い込みもしなくてはなりません。

増渕 文規

英国ダラム便り（その6）

[ダラムの秋]

結局ダラムに夏は来ませんでした。例年最高25度を超える日は余り無いそうですが、今年最高20度を超えた日も数えるほどでした。この季節は5月から9月までが「春・秋」で、11月から3月までが「冬」という5カ月単位の2シーズンなのかなと思います。4月は「春なのに冬が居座り」で、10月は「冬ごもりの準備・助走期間」というところでしょうか。

北緯53度か54度に位置しています。東京が35度、札幌が43度ですから、えらく北にあります。北大西洋暖流に近い海洋性気候のおかげで、真冬でも札幌のようなシバレル寒さは無いそうです。真冬は関東の北部並みとのことで、「超寒」覚悟で来ましたので、ほっとしています。昼でもマイナスというような日はめったに無いそうです。寒さはOKとして問題は暗さでしょう。昔、記憶が正しければ、三菱商事の駐在員福祉制度に「日照時間」休暇のようなものがありました。私が担当していた欧州では北欧の駐在員が対象で、日が短い冬に数日間、太陽を浴びに休暇に出なさいという制度です。今から思うとなかなか粋なはからいですね。東京のような冬のあっけらかんとした晴天・青空は欧州の中北部には存在しません。日が短くて曇天または雪か雨。北緯59度のストックホルムの暗さはひとしおでしょう。だから会社は保健休暇を考えたわけです。北欧では11月に自殺者が一番多いそうです。ドンドン暗くなって気が滅入るせいだと言われています。北緯48度のパリも暗かったですから、ダラムの暗さは相当のものでしょうか。ここのところ加速度的に宵闇入りの時間が早まっています。幸い9月後半から好天が続いていますが、気温は冬ですね。今のところピリッと引き締まる気持ちの良い寒さです。

当地は丘陵地帯で樹木が多いせいもあり、リスと野兎をそこらじゅうで見かけます。9月後半からリスが木から下りて何やら地面を走り回っています。ひょっとしたら冬籠りの準備でエサを集めているのでしょうか。英国のリスの色は大体グレーですが、米国産だそうです。英国オリジンは茶褐色で、米国からの侵入者に押され、今や一部限定地域だけに棲息するそうです。なんだか両国の今の力関係を反映しているようでもあります。

私が住むフラットの芝生の庭に顔を出す野兎の数が逆に減ってきました。リスに押されて

いるのでしょうか。ダラムの西方180km位のところに観光で有名な湖水地方があります。この辺から湖水にかけてはまさにピーター・ラビットの世界で、なだらかな草原（牧場）が広がっています。田舎では犬を使ってピーター・ラビット狩りをする悪ガキが結構いるそうです。市場で売れるらしい。大学都市ダラムではそういう悪ガキはいないでしょう。

校長兼教師の稼業は色々忙しく、これから迎える暗い冬でも気が滅入るような時間がなさそうですが、アウトドア派もインドア文化生活を楽しむのが北部欧州の冬だと思います。とはいっても普通の英国人が頻繁にオペラやコンサートに出かけていくとも思えません。家に呼んだり呼ばれたりが増えるのでしょう。英国人は社交上手ですから、冬は結構楽しいのかも知れません。パブもますます賑わうことでしょう。私はもともと社交好きでありませんが、単身生活ですから、呼んだり呼ばれたりはありません。暗い冬をどう過ごすかは北部欧州に暮らす日本人共通の重要関心事項です。地場の人間でないと田舎で「暗さに負けない充実ライフ」を見つけるのは大変なことから、ロンドンのような大都会に行く機会が増えると思います。

私にとっての都会 No.1 はもちろんパリですが、同じ国内ということでロンドンに出る方が多いです。これは「はまる」かもしれないという予感があるのはロンドンの Theatre 特にミュージカルです。ソホーやコベントガーデンなどの一定地域に Theatre が集中しているので大変便利です。どこも大体ロングランでいつも30やそこらの一流プログラムが揃っていますから、前広に手配さえすれば見たい出し物をミスることはまずありません。ミュージカルに詳しいわけではありませんが、歌唱力、声量、ダンスどれをとっても「これぞプロ」という迫力に圧倒されます。今回最初に見たミュージカルは Les Miserable でしたが、熱演の中にいるだけで、体がぞくぞくする昂揚感を味わえました。お値段も2階、3階席ならお手頃です。この劇場はソホーのど真ん中であって、外から見るとただの古いくたびれたビルで、中に入ると豪華絢爛ヴィクトリア朝のインテリアといった劇場はいかにもロンドンという感じがしました。狭い劇場の割に舞台装置が大仕掛けなのにびっくりしました。ロングランだからこそできる芸当でしょう。10月6日の土曜日には Singing in the Rain を見してきました。ハリウッド映画のジーン・ケリーのあの名場面を覚えておられる方も多いでしょう。この劇場もそれほど大きくありませんでしたが、何と本当に雨を降らせていました。すごい仕掛けです。エンディングだけでなく、第一幕の終わりにも降らせますので、幕間は舞台上に溜まった水を拭き取る作業に追われます。6人登場してモップで丹念に舞台を拭いて行くのですが、これも立派なショーでした。

9月最後の週末は親やおじいちゃんの車で送られて、ダラム大学新入生の入寮がありました。各カレッジの先輩はこの日のために2週間くらいは歓迎準備をしてきました。日本の新入生歓迎に似た光景です。9月30日の夜10時過ぎにはどこかでのカレッジで派手に花火が上がっていました。3か月の長い休みを終えて、ダラムの町も久しぶりに学生でにぎやかになります。うるさいけれど、学生の町ダラムに学生がいないのは寂しいものです。

2012年10月9日

増淵 文規